



「認識」の壁を越えて

県内中学校 三年生

私は性的マイノリティである。自覚したのは中学一年生のときだ。

一年生の保健の授業で性の多様性について学んでいたとき、同級生の一人が呟いた。

「こういう人、正直気持ち悪いよね。」その言葉は、まるで冷たいナイフのように私の心に突き刺さり、性的少数者が普通の人々にとって異常な存在であることを実感させられた。自分の性的指向について他人に話したことはなかったが、その後は意識して隠すようになった。他人の目への恐怖が心に影を落とし、誰かに自分のことを話すことが一層難しくなった。

二年生での性に関する授業で「カミングアウト」の重要性を教わった。「カミングアウトを受け入れる姿勢をもち、「アウティング（無断で他人の性的指向を暴露すること）を避けましょう」との指導があったが、その時の私はそれが非現実的だと感じた。他人が秘密を漏らすことは容易だし、偏見や無理解は根強く存在していると感じていた。それでも自分のことを誰かに知ってもらいたいという矛盾した気持ちと、それに伴う恐怖が混じり、私の心は複雑に絡み合っていた。

三年生になり、ようやく信頼できる友人に出会った。彼女に、自分が性的少数者であることを打ち明ける決心をした。帰り道、意を決して話し始めた。恐怖と不安でいっぱい、声は震え段々と小さくなり、顔も俯いていった。最後のほうは声が届いていたかもわからない。情けなくて涙が出そうだった。汗のにじむ手を握り締めながら、言葉を待った。

「そうだったんだ。」

友人が静かに呟いたとき、私は弾かれたように顔を上げた。友人は微笑んで「教えてくれてありがとう」と言った。その言葉を聞いて、私は堰を切ったように泣き出した。私の心に刺さっていたものが、少しずつ解けていくような気がした。

その後、友人はこの話を誰にもせず、以前と変わらず接してくれた。「いつも通り」の対応が、私にとってどれほどありがたかったか。それは言葉では言い表せないほどだった。

現在、日本ではLGBTQの人々やメディアの努力によって性の多様性について広まりつつあるが、理解はまだまだ浅いのが現状だ。偏見による差別やいじめが顕著な例だ。調べてみるとLGBTQの人々の約6割が差別的な発言や身体的・性的暴力を経験していた。学校や職場だけでなく、病院でも差別的な言動が見られるらしい。この事実は衝撃だった。

この問題を解決するためには、学校や職場での差別やイジメを防ぐためのポリシーやガイドラインを明確にし、それに基づいて適切な対応を行うことが必要だ。他にも問題の報告体制を強化し、カウンセリングなどの心理的なサポートを提供することや、当事者と交流する機会を設け、相互理解を深めることも大切だ。これにより当事者に寄り添い、相手が必要とする対応をとることができる。

日本の性に対する理解が遅れている一方、オランダやカナダなどの性に寛容な国々では、同性婚が合法であり、性的指向や性自認に基づく差別を禁止する法律が整備されている。大きな認識の変化には国の支援が重要だが、その分多くの理解を得る必要がある。今後もLGBTQに関する情報の発信を続け、今以上に理解を広める努力が求められる。

一方で、支援者の行動にも問題がある。SNSで「LGBTQを理解はするがどうしても好意的には受け止められない」とつぶやく人に対して過剰に攻撃する行為を稀に見る。これは、LGBTQを「特殊であり、味方が少ない人」と捉え、それを守っている「自分」を誇示する考えから来るものだと思う。支援を必要とする人を助けようとする考えは重要だが、支援者が自己アピールの手段として利用することは、かえって相手を不快にさせる。誰かを思って動く時は行動に移す前に、一度立ち止まってその対応が必要か、正しいのか常に考えることが重要だ。それだけで、不必要に傷つく人を減らすことができるだろう。

すべての人は、他とは異なる個性を持っており、それは生まれつきや外的環境によって形成される。それが周囲と大きく異なる場合、特別な名前が付けられ、その名前によって保護される一方で、差別されることもある。そのため、相手を理解し、認識の壁を越えて共に歩むことが重要だ。

私は、日本が様々な人が平等に生きられる社会になることを願っている。しかし、現在はLGBTQの人々と支援者の間に認識のズレがあり、当事者が望む支援が理解されていないことが多い。だからこそ、当事者も支援者も互いに理解し合う努力が必要だ。私は、今は理解してもらおう側として発信し続け、逆の立場に立った時には相手を理解するための努力も続けたいと考えている。